

昭和二十四年七月二十三日  
 昭和五十六年五月十五日  
 第三種郵便物認可  
 發行(毎月一回・十五日發行)

(通第三八三号)

次

639.10

極重惡人唯稱仏……………花田正夫……………(21)	念仏詩抄……………木村無相……………(19)	不問語……………清水凡禿……………(17)	凡骨日誌抄(3)……………西元宗助……………(14)	御一代記聞書抄(続・十九)……………井上善右工門……………(11)	聞 <small>善人、善人法</small> 録……………白井成允……………(7)	歎異鈔第三章……………池山榮吉……………(2)	二十五・三昧式……………源信僧都……………(1)
---------------------------	------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------------------	--	-------------------------	--------------------------

# 慈光

第三十三卷

第五号



# 二十五三昧式

源 信 僧 都

夫おもんみれば三界はみな苦なり、五蘊（色・受・想・行・識）は無常なり。苦と無常と誰かいとほざらんや。然るに我等無始よりこのかた、いたずらに生じ、いたずらに死して、なおいまだ道心をおこさず。またいまだ悪趣をまぬがれず。悲しいかないずれの時に、まさに解脱分の善根をうえん。

そもそも観無量寿經を案ずるに。云く或は衆生あり五逆十悪を作りて、もろもろの不善を具す。かくの如きの愚人悪業をもつてまさに惡道におち、多劫を経歴して苦を受くること窮りなかるべし。かくの如きの惡人、命終の時善知識の種々に安慰して、ために妙法を説いて教えて仏を念ぜしむるに遇えり。かの人苦にせめられて仏を念ずるにいとまあらず、善友告げて曰く、汝もし念ずることあたわずばまさに無量寿仏と稱すべし。かくの如く心をいたして声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿彌陀仏と稱す。仏名を稱するがゆえに、念々の中に八十億劫の生死の罪を

のぞき、命終の後に金蓮華のなおい日輪のごとく、その人の前に住するを見て、一念の頃のごとくにすなはち極樂世界に往生する事を得たり、と。

この文われら來世の証誠とするに足れり、云々。

又云く。夫身において三つの罪を造る、殺生・偷盜・邪淫なり。口において四の罪を造る、妄悟・綺語・惡口・兩舌なり。意において三つの罪を造る、貪・瞋・痴なり。この十惡において、上品に犯せば地獄におち、中品に犯せば餓鬼に入る。下品に犯せば畜生道に趣く。三品の罪をとどめずんば誰か三途の報をまぬがれんや。然るに我等十惡さかりに行ず、三途疑いなし、業障もつとも重し、往生なんぞ易からん。文に云く「極重惡人無他方便、唯稱阿彌陀佛生極樂」と。幸いに弥陀の善巧にあえり、誰か頭燃をはらわざらん云々。

# 歎異鈔第三章

信を行く旅人

池 山 榮 吉

今日は第三章についてお話いたしますが、例によって、文句を追うての講義ではなく、ただ二三の感想を述べるにとどまるのであります。

第一章、第二章は、親鸞聖人が直接お感じになつたままを表白されましたのでありますが、第三章は、法然上人の述懐を、大体そのまま聖人が取次いで語られたのでありまして、その点が諷きを異にしています。章の末尾に、云々となくて、仰せ候いき、とあるのが気づかれます。もつとも、師の上人から聞かれたところに聖人が共感されて、師の仰せがそのまま聖人の感じとなつてお述べになつたものであります。

いわんや惡人をや

「善人のおもて往生をとぐ、いわんや惡人をや」これは今日では大分有名になつて人口に膾炙した文句であります。一寸聞くと実に人の意表に出ようとする無鉄砲な断案、

異を立てて人を眩惑せしめようとする逆説としか受けとれないように思われますが、その実、かえつて一点疑をさしはさむ余地のない、当然自明の理と云つていい福音なのです。何故かという、一体この文句は、相對自力の見地からではなく、絕對他力の視点から解釈されるべきであるからです。自分の力で向上發展しようとする人からは、なるほど惡人のおもて往生をとぐ、いわんや善人をやと云つた方が本当でありましょう、今この場合は、自分の力の間に合わないのを予想として、如來の廻向による救済が問題となつているのであります。その点からは、いの一歩にその恩恵に浴するのは、最も弱いもの、一歩も進めない無力のものでなくてはなりません。「譬えて云えば、ここに七人の子供があるとして、その一人が病氣になつたとすると、親の心はどの子の可愛さにも変りはないけれども、差当り病氣の子供が一番心配になるようなものです」（涅槃經）一時に



大勢に医療を施す必要にせまった時、病気の重いのを先にし、軽いのを後廻しにし、又は難船の救助の際に、泳げるものは後廻しにして、泳げないものから手をつけるのは、もとより当然のことです。

助かるべきいわれのないものを助ける、この願いが、弥陀出現の本来の目的です。これをはなれて弥陀は存在しない、その目的の具体化、実現化が弥陀であることはさきにお話しましたと思います。

#### 悪人とは

ところで、本章にいう悪人とは一体どういう意味に解すべきか。これには種々の説がありまして、私にも解釈としては或考えがありますが、解釈めくのがいやですから、それはしばらくおきまして、さしあたり先づ世間道徳の上から判断する、普通の意味の悪人とみておきます。

勢観房の著、法然上人伝記に「善人なおもて往生す、いわんや悪人おやという事」という見出しを置いて、その下に「弥陀の本願は自力を以て生死を離るべき方便ある善人のためにおこし給わず、極重悪人無他方便の輩を哀んでおこし給えり。然るに菩薩聖賢もこれについて往生を求め、凡夫の善人もこの願に帰して往生を得。いわんや罪惡の凡夫もつともこの他方をたのむべし」とあります。本章と多少云い廻しが違っていても、趣意には矛盾するところはあり

属しているのかというと、私は今日では「昔は偽善者と呼ばれて腹の立つたこともありましたが―悪人だと思つています。どこへ出してほひけをとらない悪人だと思つています。ところが世間というものは妙なもので、時として辛辣を極めて批判を下すことがあるかと思つと、時としては頗る大まかな見方をすると見えて、自分で自分を悪人と認め、みなさんの前で―もつとも信仰を語る皆さんの前だからではありませんが―悪人と名乗つてはばからないほど悪にかけては自信のあるこの私に、よくあの人は人格者だ、という意味の人格がいくらかあるもののようにみている人がすくなくないのです。もつともあの人は人格者だというのは、場合によっては、あの人はいい人だというのが同じく、あの人は別にこれといって働きはないが、人格だけが取柄だ、という余り香ばしくない意味にも解される。つまり人格が無能の異名になるのだから、取柄のない人を持ち上げるお世辞としてはまことに便利な言葉です。或はこうした意味で人格者というのかもしれないが、そうでなくて真面目な場合に、人格が高いとか何とか云われることがある。この時は本当に弱ります。あんな弱ることはありません。どうにもこうにも身の置き場がありません。穴でもあればはいりたいとは、こうした時のことです。

こうしたことがあるにつけても、つくづく思わずには居

ません。悪人も悪人なるが故に助かるのではない、本願を信じ念仏を申せばこそ助かるのです。善人にしても善人だから助かるのではない、やはり本願を信じ念仏を申さなければ助からないのです。

悪くてもかまわないと考えたり、甚しいのになると―第十三章に薬あればとて毒を好むべからずという聖人の仰せを引いて誠に悪くなくは助けにあずかれないのだから、存分に悪いことをする方がいいのだ、ということとてつもない考えを起したり、或はまた反対に、我が力で善を励んで、往生の因にしようと思えるのは、どちらも本願のいわれを解せず、かつは身の程を知らぬから起る偏見で、私に云わせると、両者とも、ある意味において善人であり、後者を自力作善の可能を信ずる誤差の善人とすれば、前者は現在以上になお自力作善の余裕があると信じている矢張り誤差の善人であります。こうした人は自分免許の善にこだわる相対根性から脱却しきれない。従つてひとえに弥陀をたのむころがないから、本願招喚の声にとくと耳を澄ます気にもなれず、悪人救済の弘誓の船に乗り込んでしまふ思い切りがつかないのです。

#### 身柄調べ

ここで一つ話題を転じて、私自身の身分調べ、品性調べをしておきましょう。一体私は、善人が悪人か、どちらに

られません。この私という人間は口には悪人と自称しながら、暗に善人と見せかける手管にたけたなかなかな喰えないしれものだ。偽悪を看板にする偽善の名手だ。だから世間の人が買被つて、あの男もまさか口でいうほどの悪党でもあるまい、或程度まで善人たるを許さずばなるまいと思うのだ。さてさて油断のならない奴であると、我ながらあきらめるんです。

かつて名譽を命とさえ思つた私が、どうして今では、人前で自分を悪人と吹聴して恬然としていられるのか。どうして内心その通り信じて疑わないのか、どうしてそんなに思い切つて自分を悪人と断定することが出来るのか、それについて少し考えて見たいと思います。

#### 善人の苦手

「真実であるということ―これが出来る人はすくなくない！出来てもしようと思わない者もある。一番出来ないのは善人だ。イヤ善人だて―善人というものは決して真実を云うものじゃない。そんなに善いのは精神の病だと見るんだから」ニイチェ。

随分うがった観察ですが、単なる皮肉として一笑に附し去るべきではない。人の上にも我が上にも、日常ありがちな事実です。成程悪人にしてはじめて喝破し得る真実だと思えます。これについて私の感じた一例をお話して見よう。



世には往々君子型とでも称すべき人があります。ことに教育界に多くみかけるようであります。この型の人は、自ら高く道徳家をもって任じています。その人が道徳上の權威と仰ぐ古来の聖賢の教は、その人の言行の規範です。何が善、何が悪かはその規範の通りによく知っています。勿論品行は方正です。喜怒哀楽の感情さえ、みだりに表にあらわしません。時々ほんとに君子だなと感心させられることがあります。その人と応対しているとおのずからたいらかな気持ちになられます。けれどもその気持には春風駢蕩の温い情味がともなわないで、むしろ秋風落莫のうらさびしさの漂うのはどうしたものでしょう。大理石の彫像に手を触れて、指頭の冷たさに驚く類でしようか。その人の態度には狎れることを許さない幾分のぎこちなさはあるが、云う所はあたらす、さわらず、さすがによく練れたものなのです。が、一つ心得ておかねばいけないことは、その人の前で熱情的な話をもち出すことだけは禁物です。すぐ話をそらされてしまいます。無論性の問題などはてんからいけません。金銭、ことに俸給の問題などもしない方がよいございます。思想問題でも所謂主義的傾向をおびるかぎり大禁物です。政治問題でさえ、時の政府を批判するような場合、大いに熱情をこめて弁立てようとすると、相手は急にだまってしまうて、こそそと席をはずしてしまうの

人たるところなんです。ところが世に悪人なるものがあつて、そこをつけこんで、善人などという者は眞実を云うものでないと云うのでしよう。本章にいう善人が、こうした善人ばかりとは申しませんが、自力作善の人の中には、えてしてこうした善人がすくなくないので、こうした善人は、それぞれ權威と仰ぐ規範の衣を身にまといまします。気の多い人になると、古今東西にわたる、汝まさになすべしの彩衣を十重、二十重に重ねます。が、内側で心の底に、汝まさになすべしということが無視し、これに反抗しようとする気配があるが、それには取合いません—そんなに眞実なのは心の病なのですから—懸命に目を閉じ耳を塞いでしまいます。見ても見ぬふり、聞いてもきかぬ体にするのです。所謂、耳をおおうて鈴をぬすむという随分馬鹿げた話ですが、それは善人の自己保存本能がそうさせるのです。そうでないと善人は当然自殺を強要されるはめにおちるからです。善人の愚かさは不思議なほど賢いのです。

#### 他力をたのみたてまつる悪人

外面を賢善精進にいろどるのかまける善人にひきかえて、内面の虚仮不実をおめずおくせずみつめることの出来るのが「他力をたのみたてまつる悪人」です。これが即ち本章にいう悪人なのであります。自己凝視は悪人の得手で

です。こうした時、ハハア、あの人は善人だな。その人にとつてはそうすることが道徳的なのです。私達がうっかり平気で話すことが、その人の權威と仰ぐ道徳の規範になると、君子の口にすべからざることであるからです。

が、どうでしょう。口にさえしなれば思うことは思つてもいいのでしょうか。その人は果して私達の思うことを全く思わないでいられるでしょうか。その人だつて同じ日本の民衆の一人で、同じ時代に生をうけて、教育の程度もほぼ同じなのですから、大部分とはいかないでも、多少は私達の考えと共鳴するところがなくてはならないはずですが、その人は敢て口に出さないと、う点だけではないでしょうか、その人は私達の思うようなことを思わないこともあるでしょうか、たまたま思つた場合にはあえて口に出さないで、心の奥に秘めて置か、それがいやならいっそ思わない体にしてしまふのでしよう。さもないと心と行と一致しないという、言いかえると眞実であるという道徳上の大原則にもとることになります。思つても云わない、或はちとむつかしい芸当だが、自分にも思わない体にする、道徳家たるやまた難い哉です。しかしその人は權威の命ずるところに好んで服従し不足がましくは思いません。けれども、己がいうことには耳を貸しません、そこが善人の善

あるだけ、善人にとつては苦手です、それは主として各自の姿をうつす鏡の相違に原因します。即ち一つは他力、信仰の鏡、一つは自力、道徳のそれに照らすからであります。

——未——完——

★★★

#### 法のみ山

★★★

★★★

法のみ山のさくら花

昔のままに匂うなり

道の枝折のあととめて

悟りの高嶺の春を見よ

法のみ山のほととぎす

昔のままに名のるなり

浮世は夢ぞ短か夜と

驚きさます声を聞け

法のみ山の秋の月

昔のままに照すなり

教への風に胸の雲

払いて眞如の月を見よ

法のみ山の白雪は

昔のままに積るなり

身をも捨てたる跡踏みて

深き教への奥をとえ



# 聞 法 録

白 井 成 允

## 近角常観先生

東京での私の聞法の思出は、近角先生から勧められて、『歎異抄』を繙いた時に始まる。この書の中の「浄土の慈悲」という言葉に心奪われた。「浄土の慈悲」というのは、念仏していそぎ仏になりて大慈大悲心をもて思うが如く衆生を利益するをいべきなり」「浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだいずれの業苦にしずめりとも、神通方便をもてまず有縁を度すべきなり」これらの言葉によつて私は初めて仏教に云われる浄土という処の不思議な徳を思わしめられた。神に召されて天国に昇つても、私は現に審かされて地獄に苦しんでいる母をどうすることもできないのに、仏教の浄土は、其処に往く者をして仏の覺りを開かしめ、仏として永遠に無碍に活動することを能くせしめて下さるから、私は浄土の徳に撰められて必ず仏の覺りの中に母と共に相見ることが出来る。この思いは何より先に、私の心に入つて、私に限りない望みと慰めとを与えられた。私は

是の如き慈悲深き仏の教を聞くことを喜んだ。  
然し思うが如く衆生を利益するとか、有縁を度するとかいうことは、浄土の徳として仏の覺りを開かしめられた時のことである。それは有難く尊いことであるけれども、私共はどうしてその境に到り得ようか。即ち浄土の往生は如何にして可能であろうか。私は、日々『歎異抄』を読み、日曜ごとに求道会館に参つて近角先生の法話を聴くことに励んだ。それによつて浄土往生の道が明らかに示されるのだと思つて。

(この思いは、人生の理想を見失ひ、人は何のために生きるのかを疑うて迷つていた私の心に、ともかくも新しい道が示された。浄土に往生して仏の覺りを開く、この一事こそ人生の究竟の理想である。このためにこそ私は生きるのだ。―この望みを私に醒めさせて下さった新らしい東京の師友を、私はいくら感謝しても感謝しきれない。)

然るに先生の追憶を先生にお別れした後一二ヶ月の頃に記しておいた小文が焼けずに今も残っている。その中から二三をそのまま抄録する。

「：何のために生きるのかという久しい疑いはおのずから解けて、ただ浄土に生まれるために生きる身であると思われてきた。それならば如何にして浄土に生れ得るか。ただ信心一つに由る。私は信心を得ねばならない。こうして私は信心を得んがために日曜毎に先生の御法話を承わることに努めた。然しそれは極めて難い事であつた。先生のお話は何時聞いても同じ事である、同じ教を同じ一つの先生の実験と、同じ二三の譬喩とで繰返し語られるばかりである。私はそれを聞きおぼえて解つてしまったようでありながら、而も如何にしても真には聞き抜くことができない、信心が得られない。焦燥しながら思うに、これは私が不真面目であるからだ、もし一日でも真面目になり得たら信心が得られる筈である、私はどうかして真面目にならなければならぬ、真面目になつて御教を聞かなければならぬ。然し真面目になるといふことは何と難い事であらう。私は日曜毎に、今日もまた真面目に聞きとおすことが出来ずじまつたといふ歎きを繰返しながら、それでも、先生の誠心一つに捕えられ、先生の涯も無く和やかにして上も無く厳そかな徳にひかれて、御教を聞かずにはお

られなかった。

先生の御法話の後には往々座談会が開かれた。その席では信仰の告白だの、求道の質疑などが為された。質疑に対する先生のお答は懇切丁寧を極め、質問者の問おうとする所を却つて先生の方からあらかじめ見抜かれて深い同情を注がれ、厳しい批判を下されるのであつた。話が徹しないとなると、先生は信の灼熱せる鉄塊とでも云うべき姿となり、畳をたたき膝詰めに攻め寄つてこられた。質問者は自らどうすることも出来ない窮地に追い詰められて降伏するより他なかつた。それによつて数多くの人々が疑いを除かれ信を獲て新しい生活に入った。その入信の告白はしばしば法悦に歓喜踊躍する相を現わした。或日曜などには、先生の御法話が終たら、突然一人の軍人が立ち上つて、自分は今まで仏法の話聞いたこともなかつたのに、今日初めて先生のお話を承わり、はしなくも仏様のお慈悲を知らせていただいた。こんな不思議なことはない、すすりなきながら讚歎した。こんな尊い人々の姿を見るにつけても私は三年も四年もお聞きしながら徹し得ない自分の不真面目を歎いた。

遂に或る(夏期求道会)座談会の席で、私はもうたまらなくなつて私の不真面目を訴えた。不真面目のためにいくらか聞いてもお慈悲がはつきりしない、信心が得られない、



その苦衷を訴えた。先生は溢れるような同情を寄せて告げてくださった……。

君はもう久しく私の話を聞いているのに、まだそんなことを云っているのか。君は真面目になつたらお慈悲が聞かれるのだ、信心が得られるのだと思つている。けれども、そんなことを私が何時云つたことがあるか。自分の真面目で仏様の信心を擲もうとでもしているのか。自分の真面目で擲み得るような信心ならば、それはまた自分の心と一緒にどうにでも移り変わるものだろう。そんなつまらない信心など得て何になるか。一体君は真面目になつて／＼と思つているけれども、君が自分で真面目になり得るのか。仏様は君に向つて、真面目になれ、真面目にならなければいけない、などと云われはしないではないか。むしろ反対に、仏様の御心では、君がいくら真面目になろう／＼と思つても駄目なのだ、とても真面目にはなれないのだ、真面目になれないのが君の本性なのだ。その本性がいかにも／＼可哀そうでたまらない、と云つて、君の真面目になり得ないその処に何処々々までも同情し、飽くまでも見捨てないと呼んでくださるのだ。真面目になつて信心を得よと言われのではなく、君がどうしても真面目になれない者だと見抜いて、その真面目になれない君の姿にどこまでも同情して捨てず、必ず救わずには措かないと、かかりきつていて

までも知らしめし慇懃みくださる御慈悲が南無阿弥陀仏と現われてくださる。これは今日の私にとつて——年々歳々あさましい罪業を造り出し積み集めて、齢と共にいよいよ悪道に迷ふこと深くなつてきた私にとつて——限りなくありがたいことであり、全く究竟の救いである。この私の永遠の生命にとつて上無き救いの道を私は近角先生の御誠めによつて聞いていただいた。これ真に謝しても謝しても謝し得られざる鴻恩である。

以上は私の旧年の文の再録である。これをお読み下さる方々には恐らく種々の問題が起られるだろうと思う。そしてその中の根本の問題として、私が初めに心ひかれた浄土往生の願いが如来のやるせないお慈悲を聞くという事において如何に解決されたのであるかと問われるであろうと思う。旧文において其に答える前に、先生の信仰を示されるためにしばしば語られた、譬喩を思い出して記しておく。

——未 完——



くださるのだ。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられ、罪惡深重、煩惱熾盛の凡夫を救おうと願うてくださったのだ、君はこの仏の本願を聞かずに、自分の思いで、全く逆の方に向いているのだ。

およそ、このような事をその時先生は厳しく告げてくださった。私はそれをお聞きして、今までの自分の思つていた所が全く逆であつたことを知つた。真面目になろう／＼といくら努めてもどうしても真面目になり得ないのが自分の本性だと始めて眼をさましていただいた。こんな不真面目な者でいながら真面目になろうなどとする事が身の程も知らぬ甚だしい驕慢なることを覚えた。そしてかかる不真面目な者を、不真面目なるが故に飽くまでも救うと呼べる無限のお慈悲こそ、南無阿弥陀仏のおんころなることを聞いた。

ただ私は極めて鈍感の性である。だから私の聞法のたどりにおいて此の極めて重大な事が何時のことであつたかも記憶に存せず、またその時直に信心歡喜という程に強い感激に入ったのでもなかつた。ただ確かなことは、その時まで焦り求めて来た心の煩悶が、その時から解かれた、そして不真面目が気にかからなくなつた。不真面目な自分の姿が現われるとすぐにお念仏が現われてくださる。こういう如何ともすることのできないあさましい自分の苦惱を飽く

#### 近角先生の『落穂集』

##### 珠数を房を持つてつるされて

先生は珠数の房の方を持つてつるされて、我等もまた摺取不捨の仏のおまことにおさめられてこそ、自分の落ちこころも知らされる。自分の駄目さが知れただけでは煩悶するばかりで落着きはない。本當にすくわれてこそ、成る程駄目な、地獄一定と知らされ、そこに煩悶はなく、御恩があるばかりである。これを機の深信という。

##### 空の袋を出されてのお示し

我々はうつろな心を何とか満たそうとして、或は物、或は人にそれを求め／＼てさまようけれど、何時までたつてもうつろは満たされない。信仰上のことでもその通りで、何とかして信心を得たい、喜びたい、よくなりたい、しっかりしたいと求め廻るけれど駄目である。  
ところが仏のお救いは、そういう何処まで行つても、どんなにしても満たされることのない空っぽの心を見抜いてその空の袋の底から、それが可愛想である、不憐である、無限に慈悲を注いで下さる。袋の底の方から逆に仏のまことをもつて満たして下さるのである。

向うにあると思つた光が後ろからドツと照して下る。如来廻向とは、我々の求める方向とは逆である。



# 御一代記聞書抄 (続・一九)

井上 善右工門

同く夢に云く、大永六、正月五日夜夢に前々住上人仰せられ候。「一大事にて候、今の時分がよき時にて候、ここをとりはずしては「一大事」と仰せられ候。「畏りたり」と御受け御申し候えは「ただその畏りたると云ふにはなく候まじく候、ただ一大事にて候ふ」由仰せられ候ひしと云々。(中略)私に云ふ、夢等を記すること、前々住上人世を去りたまへば、今は其一言をも大切に存じ候へば、かやうに夢に入りて仰せ候ふことの金言なることまことの仰とも存ずるままこれをしるすものなり、誠にこれは夢想とも申すことどもにて候。総体夢は妄想なり、さりながら権者の上には瑞夢とてある事なり、猶以てかやうの金言の言葉は記すべしと云々。

(第二五六条)

第二五二条より第二五六条まで五条にわたって兼縁公の夢想が記されています。兼縁は蓮如上人のお子様ですが、

と仰せられているお言葉は年を取ると共にひしひしと此の身に沁む人生の姿であります。

大事とは何としても捨ておかれぬ大切な事との意であります。この空しい人生の空虚の底を破つて、この身を撰め取つて下さる真実の光がましますにもかかわらず、よしなきあだ事に心奪われて酔生夢死する身をみるにみかねて呼びかけて下さる言葉こそ「一大事にて候」という一句であります。法然上人の和語灯録にも「此のことに過ぎたる一大事何事か候ふべき」との仰があります。大事の上に一字か附されている事は、最大一との意であります。「此事に過ぎたる事なし」との意を強く示されるためであります。浄土に往生するということは、人生の根本問題を解決して、人間と生れた意味をこの度び全うすることです。それを後生の一大事とも言われてきました。しかしそれは決して現在の人生と関係のない後生ではありません。否むしろ後生とは、人生の背後にある真実永遠の生命を指す言葉と拝することができます。現世の人生はしばらくです。真実の生命は現生に尽きるものではありませんから、現生が終つても永遠の真実は絶えることがありません。その故にまさしく後生であります。

「今の時分がよき時にて候」今こそ二度とない絶好の時

多くのお子達の末近く誕生されました。その夢の記は蓮如上人御往生後五年目(文龜三年)から始まり順次二十八年目(大永六年)に及んでいます。本条がその二十八年目の夢記でありまして、如何に父上蓮如上人を追慕尊崇されつづけられたかが偲ばれます。

この夢想には上人のお言葉として「一大事という事が三度び繰返されています。我々は目先の生活に心奪われて人間と生れた最大の大事を忘れていることが実に多いのです。しかもその心奪われている目先の事柄は畢竟空しいものでしかありません。御文章に「ただいたずらに明し、いたずらに暮して年月を送るばかりなり、是れまことに悲しむべし」(三ノ四)とまうされ「然るにその中には然りと

であるとの意であります。受け難き人身をうけ、値い難い仏法に遇い、阿弥陀仏の本願を聞く身になつた事は、時節到来の証拠であります。聖人が本典に「聞思して遅慮することなかれ」とまうされ、さらに「若しまた此たび疑網に覆蔽せられなば、更りて復曠劫を巡歴せん」というやせないお言葉がほどばしつていられるのも此の爲めであります。

「いろいろ人生の面倒な事が生じて、仏法に専念することができぬという人の言葉を聞く事がありますが、それは思い違いであります。人生の煩悩悩みこそ仏法の真実を聞き開く好縁であります。何もなく空手で法を聞くということは、法の輪郭を聞いて内味をもたぬものとなりおわります。

維摩経の仏国品には菩薩が浄土を建てたまうことは只管に衆生を成就せんためであることを譬えて、虚空に宮室を造立することは出来ない。空と地との上にこそ建立することが出来ることと述べられてありますが、味い深い尊い言葉だと感じます。その空と地というのは、衆生とその衆生の悩みとを指されていると感じるからです。我々の悩み煩悩の上にこそ浄土が建立されるということは、悩みあり煩悩あればこそ、それを大地として浄土の真実が顕現して下さる事でありまして、かくてこそ衆生を饒益成就したまうのであります。



悩み多ければ多いだけ如来のお涙はより繁く注がれているのです。途方にくれる者にこそ如来は常に共にあり、照しなくさめ励まし導いて人生の行路を全うさせて下さるのです。それを思えば「今の時分がよき時に候」というお言葉は今こそ此の身に頂戴しなければなりません。今を取り損じては二度と浮びえぬ流転の渦にまき込まれてしまふでありましよう。御文章に「宝の山に入りて手を空しくして帰らんに似たるものか」（四ノ三）と嘆じられてはいるのもその事です。今を措いて聞くべき時はないのであります。

### 三

兼縁公の夢には上人が「今の時分がよき時にて候、ここをとりはずしては一大事」と仰せられるを聞いて「ただ畏りたり」とお受けをしたのです。「畏まる」とは慎んで仰をお請けすること、古書には「恐懼敬畏して命に服する意」とあります。ところが、そのように申上げたのに対し上人が「ただ畏りたると云ふにてはなく候まじく候」と言われ、繰返して「一大事にて候」と仰せられたとあります。畏りてお受けする、ただそれで事か済むのではないと申されるのです。

世間通途には、承諾という事で意が通じたように思うて済すのであります。但、仏法の事はただお請けという承諾では事済まぬ。ああまで我身の一大事として、今現にその一

## 凡骨日誌抄 (3)

—— 振り返る ——

春めいた街をぶらりと歩いていましたら、あるお寺さまの掲示板に

美しい花が咲いた

かくれた根のおかけ

と、ありました。ほんにと、肯きながら、手帖に書きこむ。なおひそかに想うこと、「美しい花」とは、あるいは信心の感謝の念かもと。さればまた「かくれた根」とは、「助けんとおぼしめしたちける本願」かもと。

### 〇

「ことしも亦まもなく、足利浄円先生のこの世を去られた祥月のご命日（五月二十五日）がまいります。先生は、一見まことに寂かな方であられたが、しかしその内面には、殊にお若いときは烈しいもののがあられたことが想われる。

たとえば、青年僧時代、海外に飛びだし、十余年にわたってアメリカ及びハワイの開教の先駆者として尽力されたことはその一つ。ついで病に倒れて帰国してしばらくなき

大事に身を挺するのでなければ意味がない。そのところを「畏りたりといふにては候まじく候」と釘を打たれたのであります。ただの受け入れ、それは結局、多く聞き流しに終るものであります。聞き流し出来ない事こそ一大事であり、「畏りたり」では済されぬのです。現在只今、後生の問題の決着をつけてこそ、一大事の意味があると夢の中でおさとしを受けたのであります。

このような夢を見られるという事は兼縁公が一大事を真に心にかけておられたからでありましよう。ここに改めて「往生は一人のしのぎなり、一人々々仏法を信じて後生をたすかる事なり、他事の様に思う事は且は我が身を知らぬ事なり」（一七一条）という一節を胸に沁みて有難く感じること次第であります。

上来五ヶ条の夢物語りを結ぶ言葉が「私に云く」と編者（実悟尊者）によって附されています。夢想は一般に妄想から生じるものであるが、真実に道を求める人の夢には、その人のまこと心が凝って夢告となって現われる事がある、これを瑞夢といわれると記し、蓮如上人が世を去りたまうた今、そうした真実の夢の一言をも大切にしたいという思いから、瑞夢の金言をここに記する次第であると述べられております。

## 西元宗助

ると、先生は当時の本願寺教団にあきたらないで、選俗して印刷業「同朋舎」を始められた。これは伯父足利瑞義和上や、叔母甲斐和里子女史の反対を押しきってのことであられた。そして、大正十一年三月の全国水平社の結成にさいしては、どの業者もその宣言文の印刷を引受けないので、それを一手に引受けて警察の取調べをうけられたことはその三である。なおそのころ——大正年間から昭和十年代の同朋舎の印刷工場は、被差別部落の青年を優先的に採用されながら、そのことを誰にも口外されなかつたことを、ここに記しておく。

わたしがこのことを、先生から打明けられたのは、先生の晩年——昭和三十年のころであつて、同和問題について特によろしく頼むとは、先生の最後のご委嘱であつた。

なお、先生の旧著『仏声人語』をひもどいてみると、その巻頭に、左のようなお言葉が述べられてあつた。

「独樂は、他から撲（ぶ）たれて舞いはじめるように、



わたしは誰からか撲たれないと舞えぬ男のようである。ぶたれるということはありがたいことであると思つている」  
なんという、すさまじいお気持であられたことか。稽首し禮拜したてまつる。

○ 寸暇をめぐまれて春の一日、前お裏方・大谷嬉子さまの「恵心尼公の生涯」を拝読する。多年のご研鑽に加え、丹念に実地踏査されたうえで筆をとられたもので、しかも敬虔の情を極力抑えて、どこまでも客観的な筆致で、特に宗門内外の心ある人々に広く読まれんことを念願されて刊行されたものである。

世評もよく、わたしの見るところ学術的な価値も高く、今後の恵心尼研究の有力な文献資料となることはまちがいない。おくればせながら紹介させていただきます。（同書は主婦の友社刊・定価千二百円）

○ この冬、雪の深かった東北のさるお寺の奥さまからの、こまごました楽しいお便りの中に、

「ほんのすこしの就寝前の時間に、本を読むのが楽しみでしたものが、最近は何をしてもたのしくなつてきました。雑用というものが何もなくりました。有難いことだと思つています」

題して、先般、花田正夫先生の『生死を越える道』をだした亀岡邦生氏の樹心社から刊行されることになった。跋文を書けとのことで、甚だまずいものを寄稿させていただきましたが、その詩集の中の一・二を左に紹介させて頂く。

### 仏の道

ふみはずしましたが  
気がつけば

こども仏の道でございました

### ふり返る

ふり返れば

えんえんと幾山河  
いまはただかたじけなく



とあつた。そのお気持ちは、私にもいささか肯ける。いわゆる雑用もまた案外、大事なことで、また楽しいものであることを教えられ、感じている昨今である。

○ 福井県武生・和上苑（特別老人ホーム）の無相さんが、おめでたく喜寿を迎えられる。豪雪にたえて、よく生きてくださいました。南無くくと、お祝い申しあげます。  
この無相さんの、最近の本誌に載けられた念仏詩「死ぬるを転じて」の一節に

香師おおせに  
死ぬると

思ふな  
生まると

と、あるのが特に身に沁みました。ありがとございます。

ここまで書いて、もうお一人、喜寿を迎えられる栄一さん―榎本榮一翁のことに気づきました。まことにおめでとございます。  
殊に榮一さんはこのたび、その第三詩集を『難度海』と

### つれづれ草 (百八十八段)

京にすむ人、いそぎで東山に用ありて、既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべき事を思いえたらば門より帰りて、西山へ行くべきなり。ここまでつきぬればこのことをば先ず云いてん。日をささぬ事なれば、西山の事は、かえりて又こそと思いたためとおもう故に、一時の懈怠、すなわち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

(二百十一段)  
よろずのことはたのむべからず。おろかなる人は、ふかく物をたのむゆえに、うらみいかる事あり。

(二百二十九段)  
よき細工は、少しにぶき刀をつかうという。妙観が刀はいたくたす。

### (百八十七段)

よろずの道の人、たとい不堪なりといえども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさる事は、たゆみなくつつしみて軽々しくせぬと、ひとえに自由なるのとひとしからぬなり。芸能所作のみにあらず、大方のふるまい、心ずかいも、おろかにしてつつしめるは、得の本なり。たくみにしてほしきまなるは、失の本なり。



# 不問語

## 清水凡禿

※ 言葉はさもあらばあれ」を思い併せる。

私が魚問屋を開業したのは藤沢栄一法兄の御厚志による  
ところであつたが、去る二十三日の朝、藤沢君の召集令状  
が配達された。かねて覚悟はしていたが、自分としては木  
から落ちた猿同様の感を深うした。がしかし、私が困るな  
どと云うことは贅沢なことだ。もつとく御家族はどんな  
にお困りだろう。いや本人は命を的にして行くんじやない  
かと思つた時、私は困るなどとは云われなくなつた。それ  
はほんの私の都合にすぎないのだ。

「人間万事塞翁が馬」とはよく云うことだが、まつたく  
今この頃の私の生活でよく味われる。今度の事変で召集。  
實際木から落ちた猿同然の体、今後の歩みはどうなるか計  
り知れぬ。私はただ進むだけだ。いくらでも何でもやつて  
来い、来た時は腰を抜かすかも知れぬが、御念仏が後にひ  
かえて下さっているんだ。私は弱い、しかしお念仏は強い  
有難いことだ。  
(昭和十二・九)

(註) 池山先生の歌、「たのまるるただ念仏の我にあり、さるべ

真夜中の一時半に田屋君の訃を聞く。病身の私など、足  
もとにもよりつけぬ健康そのものの同君が死んだ、全く驚  
いた。死、それは誰でもが一度は経なければならぬことだ。  
その死が早く来るのが幸か不幸か、遅くて幸か不幸か、そ  
れは判らぬ。だが幸、不幸にかかわらず、時の如何にかか  
わらずやつて来るのが死というものだ。それは誰もよく承  
知している、しかし現実生活ではなるべくその問題から離  
れようとして、種々なことでカムフラージして暮している。  
だが、如何にせん巖然と事実を眼前につきつけられた時、  
まつたく青くならざるを得ない、御粗末千万な現実の生活  
である。  
(昭和十三・十)

※ 日々人生の種々相に触れるとき、いよいよみ教が身に沁  
みて有難くなる。友が死んだ悩み、経済の悩み、何んだか

せていただきたいことだと思つた。

(昭和十六・一)

※ んだと果てしが無い、私自身が悩んでいる、その私にお友  
達が悩みをもつて来る。始めの間は、しっかりした人なら  
格別悩んでいる自分に問題を持つてくる理屈がわからなな  
つた。然し今おぼろげながら御聖教を味わさせていただき  
聖人が悩まれ、そこに光を仰がれて微笑された御生活に、  
たまらなく憧れをもつ自分の気持を味つたときに、ああこ  
こだなと思つた。  
(昭和十四・四)

※ 親鸞聖人は町から山へ入られ、そして再び山から町へ出  
られた。聖人は「非僧非俗」と云われた。聖人は「弟子一  
人も持たず」と云われた。これらのことを味えば味うほど  
有難い。町の中にあつて輝く教え。何ものにも囚れぬ自由  
な教え、確執のない、なごやかな教え。  
(昭和十五・四)

※ さる活花の先生から有難いお話を聞かしていただく。そ  
れは花を活けるには、花それぞれの個性を活かしてたてる  
こと。それからその材料に聞いてたてること。一体この材  
料はどんなにたてられ度くしているのか、材料の声を聞いて  
たてるのが大切なことだ。

自分がある型にたてようと思つたことは無理な活け方だと  
聞かされた。なるほど、それを日常生活の上に随分味わさ

※ 若い人々の純情さには、ほんとうに心打たれる。然しそ  
の若い人々が、種々な境遇におかれて、種々なことを覚え  
うそを云つたりするようになる。全く痛ましい事だ。一体  
純情は悪いことか。うそをつくる事がよいことか。一切合切  
わからなくなる。

純情一本調子でこの世が渡れたら良いのだが、中々そう  
はいかない。さればとて、うそ一本調子では無論だめだ。

そこに云うに云われぬ浮世の姿がある。それをどちらか  
の一本調子に片づけようとするところに悩みがあるのでは  
あるまいか。またそうした生活をやらねばならぬ世の中な  
ればこそ、悩みがあるのではあるまいか。私においては、  
唯お念仏一つのもとに歩ませていただくより外に道がない  
(昭和十五・二)

## 魚問屋の頃

凡禿はお寺も店も同じなりナマダナマダで世を送るなり

念仏の一本道や雪の原



# 念仏詩抄

ハカライと言うのは

香師おおせに

“ハカライと言うのは

これでも助かると

おちついているのが

ハカロウテおるのじゃ”

助かるのでない

助けられるの

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

一蓮院秀存師

香師||香樹院徳龍師

木村無相

香師おおせに

“出離のことを相談する相手は

一蓮院秀存のほかにはない”

存師おおせに

“如来様が助けて下さるで

わたしは

念仏申すばかりであった

“<sup>ワ</sup>はい”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

二つの喜びあり

香師おおせに

“一念の信に

二つの喜びあり

六道をはなる喜び

浄土の往生を期する喜び”

聖人御和讃に

“無始流転の苦をすてて

無上涅槃を期すること

如来二種の廻向の

思徳まことに謝しがたし”

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

これなりで

妙意いわく

“いよ／＼これなりで

助けられるので

ござりますか——”

香師おおせに

“そうじゃ／＼

すすめる者も

そこをよく教え

聴聞する者も

そこをよく聞かねばならぬ”

これなりでなくて

ナニが出来る

イツでもドコでも

これなりで

これなりで

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ



「こちらはウソでも

ある人

「ウソの念仏ばかり  
申しております」

と申しあげしに

香師おおせに

「オレもウソの念仏ばかり

申しておる——

こちらはウソでも

弥陀のマコトで

お助けじゃぞや——

こちらはウソでも

弥陀のマコトで

弥陀のマコトで

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

お助けはただ

香師おおせに

「ある時は往生一定と

思い

ある時は往生不定と

思う

この二つをすてて

弥陀をタノムのじゃ——

どう思ったとて

わが思いでは助からぬ

お助けは

ただ弥陀——

お助けは

ただナムアマミダブツ——

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

## 極重悪人唯称仏

極重悪人とは、涅槃經に、殺生・偷盜・邪淫・妄語の重  
い罪を造り、または五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・仏身  
から血を出し・和合僧を破る）を犯した者は極重悪と名づ  
く、とあります。

唯称仏とは、唯とはそのこと一つ、他とならぶことをき  
らうこと。称仏とは称名念仏のことであります。

観無量壽經に、善惡の凡夫の往生する道を説かれた最後  
の所に、極悪最下の凡夫が、五濁惡世に処して、五逆・十  
惡（殺生・偷盜・邪淫・惡口・兩舌・綺語・妄語・貪欲・  
瞋恚・愚痴）の罪、また種々な不善の事を犯した悪人悪人  
の命終に臨み、善知識が種々に慰安し、妙なる御法を説き  
聞かせて、仏を念せよと教えますが、この罪人は苦にせめ  
られて、只苦しい一杯で仏を念ずるいとまもないのであり  
ます。それを見た善知識は、ことに悲憫して、若し心に仏  
を思うことも出来ないなら、どうか無量壽仏の御名を称  
えなさい、と勧めますと、南無阿彌陀仏々々々々々々と十

花 田 正 夫

声称え、長い間の生死の罪が消え失せて、浄土に往生した  
とあります。

しかも源信僧都は、この悪人の救われる經文を随喜せら  
れて、常に人々に話して下さり、僧都の御臨末の際には、  
御弟子にこの經文を讀誦して呉れと仰せられて、それを聞  
かれながら念仏の息が絶え終られたのであります。又僧都  
の往生要集には「下品の三生（十惡・謗法・五逆の者）、あ  
に我等が分にあらずや」と述べられて、そこに御自身の姿  
と、その往生の道を見出されているのであります。

又、法然上人も、観無量壽經の解釈の中に、十惡・五逆  
の者のたすけ遂げられるところで「この下品もつとも要な  
り、頗る我等が分に相当せり」と特筆していられます。思  
うに十五の時叡山にのぼられ、四十三の頃「經典を披覽す  
るに我が智ひるがえって闡し、行法を修習するにすべてお  
よび難し」と嘆げかれて、或は南都、或は北嶺の高僧の門  
を訪ねられ「十惡・愚痴の身の往生の道」を問われたけれ



ど、誰一人として答えてくれる人は無かったのに、源信僧都のお勧めから、善導大師の観無量寿経の疏をひもとかれて「余が如き下機の行法は阿弥陀仏、法蔵因位の時、かねて定めおかるるをや」と落涙千行万行の中に念仏門に入られたのであります。

親鸞聖人は、源信大師和讃に

極悪深重の衆生は、他の方便さらになし

ひとえに弥陀を称してぞ浄土に生ると述べ給うと讃仰しておられます。

悪人の往生成仏の白道を、このように伝々相承されて、私共の前に開示して下さったのであります。

### 死刑囚I君のよろこび

I君は関東の人でありましたが、戦後巢鴨の刑務所は戦犯者の収容所となっていたので、名古屋の拘留所に入ったのでありますが、死刑の判決をうけて以来、悶々の中に取り乱した生活が続け、看守の人を困らせていました。当時T教務課長が「君は字が上手だが、仏法の求道者はお経を筆写している。君もそれをはじめて見ないか」と誘われた。すると、どうしたことか素直に写経に賛成し、最初に正信偈を丁寧<sup>ていねい</sup>に写しはじめました。そのうちに、課長さんに「極悪人唯称仏とありますが、私自身人様<sup>ひとさま</sup>から見捨てられ、

ながらも、まだまだと遠くにやっております。まことにしぶとい奴です、と感慨深そうに語ってくれました。

其後、京都の足利浄田先生を、同君がお慕い申すようになり、先生から仏画を送って下さり、また佐々木徹真さんが京都から面会に来られて慰問されました。仏画は長女の入学祝いに送り、皆で仏前でお念仏申してくるようにと、熱い心をこめて妻君に依頼した由であります。

信道会館の主事をしていられた故・福田正治さんが教誨師として何かと世話して下さいましたが、処刑の日、一緒に仏前で最後の御礼をすませると、I君はねんごろに御礼を申し「先生、今日は私の浄土への新出発の日です。この世では自分の罪の償いも、恩を報じることも出来ませんが、今度は浄土で自由な身にさせていただき、存分にやらせていただきます。これもこの拘留所に入ったお蔭でした」と、有縁の人々や、建物までを拜んで刑場に去って行ったのでした。

さて、死刑囚のI君が、極悪人唯称仏とあるのに刮目して、私のような者に呼びかけて下さる仏様の深いお慈悲と感佩したことをのべましたが、それについて私自身を反省させられるのであります。

先ずI君と私の共通点をあげますと、彼も八万四千の

自分でも自身をもてあましておりますが、こうした大悪の者に、唯仏のみ名を称えよと呼びかけ下さるとはありがたいことですかあ！」と語るようになり、やがて念仏申すように転じたのであります。

課長さんが、I君に慈光誌を勧めて下さったことが御縁となり、四月一日に、私に面会に来て下さいとの申出があり、早速訪ねますと、I君が申しますには「今日は私の長男が小学校に入りますについて、家では、お父さんは遠くへ働きに出ていると云いきかしていますので、本人は何も知らずに居りますけれど、世間の眼は冷たく、死刑囚の子として種々な苦勞が待っていると思うとたまりません。それにつけましても、子供にも仏縁が結ばれるようにと願ってやみません。せめて入学の祝いに数珠一連でもと思いましたが、無一物の身とて、それを求めることも出来ません。そこで週に二回出るお菓子半分食べ、あとを同囚の人に売り、その金でやっと一連だけ手に入れ、送ってやりました」とのことであつた。

私が、それを早く聞いておれば、と申しますと、いやこれは私が苦勞して求めたものでなければ、私の心がおさまりません、とのことであつた。

更に、外から見られると、私共の生命は風前の灯火と思われましようが、この通り丈夫な身には、自分の死を恐れ

煩惱具足の凡夫で、ただ私が見舞することが出来たのは、そうした業縁がなかったからであります。親鸞聖人が「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」と仰った通りで、業縁次第では、どうしたあさましい業さらしをやらかすやら、そんなことは決していたしませんとすまして居られない身であります。

次に、よいのわるいのと人間同志であけつろうて居りますけれど、久遠のみ親にまします弥陀仏の御目には、一人のこらずわが一人子、いとし子とみそなわして下さるので、言わば同じみ親を持つ兄弟<sup>はらだち</sup>であります。

このI君が、不思議な仏縁に恵まれて、念仏成仏の無碍道を身にかけて証<sup>あかし</sup>してくれましたことは、私共の先達となつて導いて下さる、浄土化現の菩薩と拜まらずには居られないのであります。

良寛さんの辞世の句と称せられるものに

裏を見せ 表を見せて 散る紅葉

とありますが、I君により我身の罪業の深さと、同時に仏陀の慈悲の限りないことを教えられたのであります。



## あとがき

五月の空にはためく幟、昔ながらの思出が  
浮かぶこの頃であります。詩人は惜春の譜を  
吟じられることでしょうか。

五月の高僧達の御忌日をしらべますと、  
善導大師 五月四日。道緯禪師 五月三十  
日。

蓮如上人 五月十四日。

となつておりますが、この月、五月二十一  
日は親鸞聖人の降誕会であり、聖人の徳風を  
到るところで讃仰されますことでしょうか。非  
僧非俗の御生活、山に入られた聖人が、再び山  
を出られまして、私共と同じお暮らしの中に  
限らない仏心の大悲を渴仰下さったお蔭で、  
獵、漁の生活のままに大いな恵みに浴させて  
いただけますことであります。

源信僧都は極重の悪人の救われます観經に  
御自身を見出していられますが、池山先生が  
歎異抄三章の悪人救済の要諦をお話し下さつ  
たままを記載させて頂きました。

白井先生が聞信録の中に、近角先生に聞法

せられました信味をお述べになつていますの  
で、これを頂きました。

井上様から「一大事」ということを詳しく  
教えられました。

西元様は五月二十五日の足利浄円先生の御  
忌日を憶念されて、よき人のお姿を伝えて下  
さいました。又今回、榎本榮一様の第三詩集  
『難度海』を紹介下さいましたので私も御紹  
介申します。

念仏のうた『難度海』 榎本 榮一著

定価二〇〇円。

発行所 東京都国立市富士見台一丁目七  
一―五―四〇三 樹心社

振替・東京七―七五四四四

電話・〇四二五―七七―二七七八

清水凡禿様の短文はすでに度々頂きました  
が、盛岡の妙好人であります。その信の生活  
の一断面を御紹介しました、生活の全面に  
お念仏の香りが感じられます。  
木村様は、御無事とのこと、いつもホツと  
させられますことです。香樹院老師の信徳を  
自ら頂かれての詩、榎本様と好一對で「寒山  
と捨得」の交りをおぼえます。

## 〓 御案内 〓

〇毎月第一、第三日曜、午後一時半

一道会例会。一道会館の南隣り、

南区駆上町二の八六。鬼頭康彦氏宅

市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三  
筋目、角。

地下鉄、新瑞橋終点下車。

〇教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四

毎月二十四日、午前・午後。

市バス、御器所通り又は北山下車。

地下鉄、御器所通り下車。

〇蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半。

(但し日曜を除く)尾西市三条板倉

名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 八〇〇円(送共)

一 年 一六〇〇円(送共)

名古屋市南区駆上町二ノ八八

編集・発行人 花 田 正 夫

電話八二一―局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 坂 部 光 雄

名古屋市南区駆上町二ノ八八

発 行 所 慈 光 社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

郵便番号四 五七